

## ハンガリー語動詞接頭辞の多義性と格交替

早稲田みか

### 1. はじめに

ハンガリー語の動詞接頭辞 *igekötő* は、意味的にも統語的にも非常に複雑なふるまいをすることから、定義することがむずかしい文法カテゴリーとして知られている<sup>1</sup>。とりわけ、ハンガリー語を学ぶ学習者にとっては、もっとも習得のむずかしい要素のひとつと言える。たとえば、次の例文を見てみよう。

- (1) *Ki-pihentem*<sup>2</sup>            *magam.*  
       *out-rested*                *myself.ACC*  
       「私は十分に休息した。」

まずはじめに、元来、移動を表す動詞の前に接続して、「外へ」という方向を表す動詞接頭辞 *ki* が、動詞 *pihen* 「休息する」と結びついて、「十分に休息する」という意味になるのは、なぜだろうか？ この場合、動詞接頭辞の意味的機能は何なのであるか？ ふたつめに、自動詞 *pihen* 「休息する」に動詞接頭辞 *ki* が接続することにより、*ki-pihen* が他動詞となり、再帰代名詞 *magam* 「私自身」を疑似目的語としてとるようになるのはなぜだろうか？<sup>3</sup>

ひとつめの疑問は意味論の問題であり、動詞接頭辞の多義性に関わっている。一方、ふたつめの問題は統語論に関わるものである。動詞接頭辞の機能のひとつとして、動詞のとり項を変えるという性質があり、多くの場合、場所格と対格の交替が見られる。

本論の目的は、認知言語学的なアプローチにより、これらの疑問にたいしてなんらかの論理的な説明を与えることであり、それをハンガリー語教育に応用することである。

<sup>1</sup> ハンガリー語の動詞接頭辞については以下を参照。Horvath 1978, Beőthy & Altmann 1985, Ladányi 2000, Komlóssy 1992, 1994, Kiefer 1992, É. Kiss 2002, 2005, 2006, Farkas & de Swart 2003, Koopman & Szabolcsi 2000 など。

<sup>2</sup> 動詞接頭辞と基動詞は一語として書かれるが、本論では便宜上、ハイフンで結んで記述する。

<sup>3</sup> 動詞接頭辞の接続により、自動詞が他動詞化する現象は、英語の前置詞と動詞の組み合わせにおいても観察される。たとえば、英語の動詞 *laugh* は自動詞であるが、*out* とともに使うと他動詞になる。They laughed him out of the room.

## 2. 動詞接頭辞 ki の意味構造

動詞接頭辞 ki の意味と機能は何であろうか？ 一般的に動詞接頭辞 ki は、例文(2)のように、「閉じた空間から外へ」という意味を表す。

- (2) Kati ki-ment a szobából.  
 Kati out-went the room.FROM  
 「カティは部屋から出た。」

動詞接頭辞 ki の中心的なイメージスキーマは以下のように図示することができる。

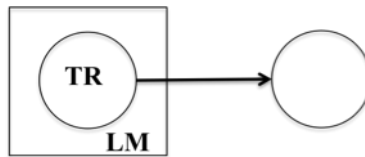


図1 動詞接頭辞 ki のイメージスキーマ

イメージスキーマは英語の前置詞の意味記述などに使われており、前置詞の意味をふたつの物体間の位置関係として図示したものである。本論では Langacker (1987)に従い、移動する物体をトラジェクター trajector (TR)、移動の起点となる物体をランドマーク landmark (LM) と呼ぶことにする。トラジェクターは視覚的にもっとも目立つ要素であり、ランドマークはトラジェクターが移動するときの参照点となる要素である。矢印はトラジェクターの移動の経路を表している。

図1は、トラジェクターがランドマークの内部から外へ移動することを示している。動詞接頭辞 ki のさまざまな意味は、この中心的なイメージスキーマから、イメージスキーマの変換や、メタファーやメトニミーにより意味拡張されて、互いに関連しあったネットワークを形成していると考えられる。

本論では、例文 (3) に見られる動詞接頭辞 ki の意味も、図1の中心的なイメージスキーマからメタファーにより意味拡張されたと考える。

- (3) a. Kati ki-pihente magát.  
 Kati out-rested herself.ACC  
 「カティは十分に休息した。」

- b. Kati ki-aludta magát.  
Kati out-slept herself  
「カティは十分に睡眠をとった。」
- c. Kati ki-dolgozta magát.  
Kati out-worked herself.ACC  
「カティは働いてすっかり消耗した。」
- d. Kati ki-sírta magát.  
Kati out-cried herself.ACC  
「カティは涙がかれるまで泣いた。」

例文 (3a) と (3b) は、カティは十分な休息あるいは睡眠をとることにより、体力を回復したという意味を表す。例文 (3c) は、カティは働きすぎてすっかり疲労困憊したという意味である。例文 (3d) は、カティは涙がかれるまで泣いたという意味を表す。これらの文はすべて、動作の主体であるカティが、基動詞（動詞接頭辞のついていない、もとなる動詞）の表す行為を限界点に達するまで完全に行うことにより、その結果、それまでとは異なる別の状態に変化したことを表現している。すなわち、休息や睡眠により体力を回復した状態になること、働くことにより疲労した状態に変化すること、泣くことによりもうこれ以上泣けない状態になることを、それぞれ表している。

これらの例文における動詞接頭辞 *ki* の意味は、行為や動作を「状態が変化するまで十分に」行うことであると言える。Kiefer (2006) は、動詞接頭辞 *ki* のこの機能を、動作や行為の飽和（過剰）性を表すアクツィオンスアルト *saturative aktionsart* として記述している。

動詞接頭辞 *ki* に、なぜこのような意味機能が生じたのだろうか？ メタファーが日常生活の言語使用において頻繁にみられる基本的な特徴であることはよく知られている (Lakoff & Johnson 1980)。また、Lakoff (1987) や Langaker (1987, 1991) により提案された認知言語学的な枠組みを用いることにより、さまざまな言語（英語、ドイツ語、オランダ語、ポーランド語、ロシア語など）に観察される、動詞接頭辞や前置詞などの多義性は、メタファーによる意味拡張により生じたものであることが指摘されている (Brugman 1981, Tyler & Evans 2003, Rudzka-Ostyn 1985, Janda 1988, Dewell 1994)。ハンガリー語の動詞接頭辞の多義性についても、Szili (2003, 2005ab) により、動詞接頭辞 *ki* と *be* の多義性が、メタファーによる意味拡張として、それぞれ詳細に記述さ

れている。

(3) にあげた例文における動詞接頭辞 *ki* の用法においても、メタファーが関連していると考えられる。それは「容器のメタファー」である。すなわち、「人体は容器である」という概念メタファーである。「人体は感情の入っている容器である」(Kövecses 2002) し、「感情や活力は人体という容器に入っている物質である」(Lakoff and Johnson 1980:50-51)。

例文 (3a-d) においては、容器である人体がランドマーク (LM) であり、体調や感情(疲労、活力、涙(悲しみ))はトラジェクター (TR) として機能している。たとえば、例文 (3a) では、休息した結果として、例文 (3b)では、睡眠をとった結果として、疲れが体内から外へ移動したと考えられるし、例文 (3c) では、働いた結果、活力が体内から外へ移動したと理解できる。<sup>4</sup>

「休む」「眠る」「働く」「泣く」といった自動詞はすべて、動作の主体が主語になる、いわゆる非能格動詞 *unergative verb* である。容器である人体は、その主体の人体である。つまり、文における主語と人体の持ち主は同一である。ここから、ランドマークである人体が、再帰代名詞で表現されていることは、論理的な帰結と言えよう。

これを証明するのが、例文 (4) の存在である。(4) は、「疲労を休息することによって体から外へ出した」と解釈できる。例文 (3a) とほぼ同じことを意味している。例文 (3a) では、再帰代名詞 *maga*「彼女自身」が *magát* と対格になっているが、(4) では(ふつうは省略されるが)、出格形 *magából*「彼女自身から」になっている。

(4) *Kati ki-pihente (magából) a fátalalmakat.*

*Kati out-rested (herself.FROM) the toil.ACC*

「カティは休息して疲れをいやした。」

これらの文が表しているのは、移動のプロセスではなく、「疲れが外に出て行って、

---

<sup>4</sup> 身体名称が疑似目的語になる例もある。以下の例文では、目が涙の入っている容器として解釈される。

*Kati ki-sírta a szemét.*

*Kati out-cried the her eye.ACC*

「カティは目を赤く泣きはらした。」

もう残っていない」という結果状態である。主体は自らの行為（「休息する」こと）により、その結果として、「疲れのない」状態に達したのである。動詞接頭辞 *ki* は、「疲れが外に出た」という結果状態を表していると言える。É. Kiss (2006) が記述しているように、動詞接頭辞は限界点を有するタイプの状況変化が完結することを表す機能をもっており、動詞接頭辞はそうした状況変化の結果状態を示している。

結果状態を表すという動詞接頭辞の機能は、移動や状態変化のプロセスの「終端焦点化」によって説明できる。つまり、事象を観察する視点を、移動や状態変化のプロセスの最終段階に向けることにより、プロセスの起点と経路が背景化されるのである。経路の最終地点、プロセスの最終段階に焦点が当てられ、そこが前景化することにより、プロセスの完了、結果状態を表す機能が生まれてきたと考えられる。つまり、「外へ」という語彙的意味が薄まり（漂白化し）、完了や結果を表す機能を獲得して文法化していると言える。

認知のプロセスから見ても、これはきわめて自然な変化である。ある地点から別の地点へ移動する物体を観察するとき、到達点に注目すれば、それは状態変化の結果でもあり、動作や行為の到達点、完了した状態でもあるからである。

イメージスキーマの上では、図2のように、ランドマークの外に移動したトラジェクターが焦点化されており（実線で描かれている）、移動の起点と経路は背景化している（点線で描かれている）ことになる。これに対して、図3はトラジェクターがランドマークから外へ移動するという、移動の起点、経路、終点のすべてが観察の視野に入っている。

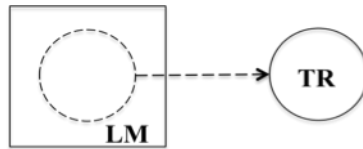


図2 結果状態のイメージスキーマ

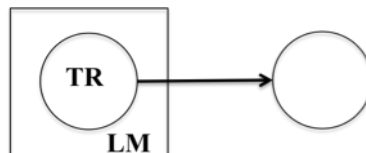


図3 移動のイメージスキーマ

認知の仕方によって、どう見えるかがまったく異なることは、古典的な図と地の反転として知られている。図4は見方により、人の顔にも見えるし、花瓶にも見えるが、同時にその両方を見ることはできない。



図4 ルビンの花瓶

動詞接頭辞 **meg** の完了を表す機能は、こうした事象のプロセスの終端焦点化によって生じたと考えられる。動詞接頭辞 **meg** は、歴史的に見ると、もともとは「後ろへ」「戻って」を意味していたが、その語彙的意味を失い、文法化したものである。

われわれはひとつの事象をさまざまな捉え方によって見ることができる。空間における位置の移動は、メタファーにより状態変化として捉えることもできるし、空間における移動は当然のことながら時間の変化でもあり、さらには、時間とともに変化する状態としても概念化できる。つまり、もっとも基本的な変化である場所の移動、位置変化は、容易に状態変化へと意味拡張されうるのであり、移動や状態変化の最終段階に注目すれば、それは結果状態を示していることになる。

以上をまとめると、次のことが言える。例文(1)は、「私は休息して、自分(の体)から疲労を外へ出した」と解釈でき、これは「外への移動」のメタファーによる意味拡張と、外への移動の経路の終端焦点化によって説明可能である。そこには、「位置変化は状態変化である」と「人体は容器である」というふたつの概念メタファーが働いている。

また、人体は動作の主体自身の人体であることから、再帰代名詞が使われているのである。次にふたつめの疑問について考えてみよう。動詞接頭辞 **ki** が接続することにより、自動詞がなぜ再帰代名詞を対格形にとる他動詞に変化するのだろうか？

### 3. 格交替

すでに見たように、動詞接頭辞がつくことにより、動詞のとり項に変化が生じている。

以下の例文 (5a, 5b) が非文法的であることからわかるように、動詞接頭辞が接続すると、再帰代名詞の対格形が必須項になる。

- (5) a. \*Kati ki -pihent.  
Kati out-worked
- b. \*Kati pihente magát.  
Kati rested herself
- c. Kati ki-pihente magát.  
Kati out-rested herself.ACC  
「カティは十分休息した。」

この背景には、動詞接頭辞 *ki* はもともと「外への移動」という位置変化を表しており、*ki* の中心的なイメージスキーマからもわかるように、なんらかのランドマークを必要とすると考えられる。すでに見たように、例文 (5c) では、ランドマークはカティの体であり、カティが主語であることから、再帰代名詞が使われることは、容易に理解できる。

この再帰代名詞がなぜ対格形をとるのかは、次の現象を分析することによって、説明できるだろう。

- (6) Kati ki-ment a szobából.  
Kati out-went the room.FROM  
「カティは部屋から出た。」
- (7) a. Kati ki-pakolta a vagonból a szenet.  
Kati out-loaded the wagon.FROM the coal.ACC  
「カティは貨車から石炭を積みおろした。」
- b. Kati ki-pakolta a vagon.  
Kati out-loaded the wagon.ACC  
「カティは貨車を空にした。」

例文 (6) では、トラジェクターが主格で、ランドマークは出格で表されている。動詞は自動詞である。例文 (7a) では、トラジェクター「石炭」が対格で、ランドマーク「貨

車」は出格で表示されている。動詞は他動詞である。トラジェクターが主格や対格で表示されるのは、それが移動するものであることから、視覚的にもっとも重要で目立つ要素だからと考えられる。Langacker (2001) も次のように述べている。トラジェクターとランドマークが主格や対格で表示されるのは、それらが述語によって表現される事象において、もっとも重要な注目される要素だからである。

例文 (7a) と (7b) の違いは次のように説明できる。(7a) では、「石炭」の「貨車」から外への移動の経路全体がプロファイルされて(視野に入って)いる。一方、(7b) では、移動の最終段階、すなわち「石炭」が「貨車」から降ろされて、「貨車」が空になっている結果状態に焦点が当てられている。

物体(石炭)が容器(貨車)から外へ移動するという事象のなかで、容器に注目すれば、その事象は容器の中身の変化として捉えられる。例文 (7b) では、移動のプロセスの最終段階におけるランドマーク(容器である「貨車」)に視点が当てられ、それが前景化されている。もっとも注目されているランドマークすなわち「貨車」が目的語に昇格して、対格形になるのは自然なことである。他方、トラジェクター(石炭)は背景化されて、文中から消えている。(7a) は移動のプロセスを、(7b) は状態変化を表している。

場所格(出格)と対格の交替という文構造の変化は、認知的な観点から見ると、焦点移動を反映していることになる。いわゆる図と地の逆転である。視覚的にもっとも目立つ要素であったトラジェクター(図)が背景化されて、背景だったランドマーク(地)が注目されることにより、それが前景化して、文中では「貨車」が場所格から対格に昇格したのである。

(7a) ではトラジェクターである「石炭」に焦点が当たっており、「石炭」の移動が問題になっている。これに対して、(7b) では、ランドマークの「貨車」が目的語になっており、「貨車」に焦点が当たっている。「貨車」の状態がどう変化したかが問題になっているのである。

例文 (8a) と (8b) の関係もこれと同様である。(8a) の文では、再帰代名詞の出格形で表示されているランドマークの「カティの体」が、(8b) では前景化されて、目的語になり、対格で表示されている。

- (8) a. Kati ki-pihente (magából) a fátadalmakat.  
 Kati out-rested (herself.FROM) the toil.ACC  
 「カティは休息して疲れをいやした。」



- b. Kati ki-pihente magát.  
 Kati out-rested herself.ACC  
 「カティは十分に休息した。」

焦点化され、前景化された要素が対格形で表示されるのは、それがなんらかの影響を受けて変化をこうむった対象として解釈されるからである。さらに、対格形で表示される要素は、一般的に英語の「壁塗り構文」<sup>5</sup>に見られるように全体的に影響を受けたと解釈される（影山 2001:101）。ハンガリー語においても、(7b) では、貨車は完全に空になっており、(8b) ではカティは完全に体力を回復したと解釈される。

動詞接頭辞 *ki* は元来「外への移動」を含意することから、それが動詞に接続すると、その動詞はランドマークを必要とする。ランドマークが焦点化されると、それは目的語となり、対格形で表示されるのである。

#### 4. 生成文法によるアプローチ

Csirmaz (2006) は同じタイプの文を生成文法の枠組みを使って分析している。それによれば、ハンガリー語の結果構文のなかには、必須項として疑似再帰代名詞（場合によっては身体名称）を目的語として要求するものがあり、それは「事象構造制約規則」により説明できると述べている。この制約規則は、英語の再帰代名詞の用法に関する Rappaport Hovav and Levin (2001) の主張に従ったもので、「下位事象構造が複数ある場合には、ひとつの事象に少なくともひとつの項が必要である」というものである。<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 英語と同様の現象がハンガリー語でも見られる。

- (i) a. John sprayed water on the roses.  
 b. John sprayed the roses with water.
- (ii) a. Kati vajat kent a kenyérre.  
 Kati butter.ACC spread the bread.ON  
 「カティはパンにバターを塗った。」  
 b. Kati megkente a kenyeret vajjal.  
 Kati on-spread the bread.ACC butter.WITH  
 「カティはパンをバターで塗った。」

<sup>6</sup> Rappaport Hovav and Levin (2001) は、次の例文に見られる英語の結果構文における再帰代名

具体的に見てみよう。例文 (8b) には 2 つの下位事象が含まれている。ひとつは「カティは休息した」。もうひとつは「休息の結果、彼女は体力を回復した」である。このように 2 つの事象構造を有している場合は、2 つの項を必要とする。ゆえに、主格に加えて対格が必要となり、同じものを指しているために、それが再帰代名詞で実現されるという説明である。

É. Kiss (2005) は、動詞接頭辞の有無は事象構造によって決まると論じている。動詞接頭辞のない動詞は単一の事象を、動詞接頭辞付きの動詞は複数の事象を表現しており、動詞接頭辞は述語的な機能を有していると述べている。例文 (8b) において、動詞接頭辞 *ki* は、「疲れが体の外に出た状態にある」という事象を表す述語的な機能を有していると考えるのである。

Csirmaz (2006) も É. Kiss (2005) も、動詞接頭辞付き動詞は複合的事象を表すという点で同じことを主張している。認知意味論の観点から言えば、ある場所から別の場所への移動がひとつの事象であり、移動の結果状態がふたつめの事象に対応しており、どちらの事象に焦点があるかによって、構文が異なっているのだと言える。

自動詞に動詞接頭辞 *ki* が接続すると、再帰代名詞を目的語として要求する現象について、É. Kiss (2006) は、非能格動詞は、疑似目的語と結果状態を表す動詞接頭辞とともに使われるときにのみ、限界点を有する終結事象を表すことができるという規則をたてている。

こうした規則により文法的な文を生成することはできるが、学習者にとっては、むしろなぜそのようになるかという論理的な説明の方が有益ではないだろうか。

## 5. さいごに

本論では、ハンガリー語の動詞接頭辞 *ki* は、「外へ」という移動の方向を表す基本的な意味を持っているが、それが「状態が変化するまで十分に」という意味に拡張されたことを見た。

この意味拡張には、視点の移動とメタファーが関わっている。「十分に」という非空間的意味は、移動の終結点に焦点をあてて（終端焦点化）、経路を背景化することによ

---

詞の使用を、下位事象には必ず項がひとつ必要であるからと説明している。

- a            poor Sam... had coughed himself into a hemorrhage....
- b.            \*Poor Sam had coughed into a hemorrhage.

って生じたと考えられる。また、「移動は状態変化である」と「人体は容器である」という概念メタファーが働いていることも指摘した。

再帰代名詞が目的語になる点については、場所格（出格）で表示されているランドマークが、焦点化によって、対格に昇格したと説明した。

言語の構造は人間の認知の仕方と密接につながっている。同じひとつの事象であっても、それをどのような視点で、どこに注目して捉えるかによって、構文構造が異なってくる。そこには焦点移動、前景化、背景化、図と地の逆転、メタファーといった認知プロセスが関わっている。

### 参考文献

- Beöthy E. & Altmann G. (1985) The Diversification of Meaning of Hungarian Verbal Prefixes I. *meg. Nyelvtudományi Közlemények* 87, 187-196.
- Brugman, Claudia (1988) *Story of OVER*. New York : Garland.
- Csirmaz, Anikó (2006) Accusative Case and Aspect. In Katain É. Kiss (ed.) *Event Structure and the Left Periphery. Studies in Natural Language and Linguistic Theory*. 159-200. Dordrecht : Springer.
- Dewell, Robert B. (1994) Over again: Image-schema transformations in semantic analysis. *Cognitive Linguistics* 5-4. 351-380.
- Farkas, Donka & Henriëtte de Swart (2003) *The semantics of incorporation*. Stanford: CSLI.
- Horvath, Julia (1978) Verbal prefixes: A non-category in Hungarian. *Glossa* 12.2. 137-162.
- Janda, Laura A. (1988) The Mapping of Elements of Cognitive Space onto Grammatical Relations: An Example from Russian Verbal Prefixation. In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. 327-343. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 影山太郎(編) (2001) 『<日英対照>動詞の意味と構文』大修館書店
- Kiefer, Ferenc (1992) Aspect and conceptual structure: The progressive and the perfective in Hungarian. In Ilse Zimmermann and Anatoli Strigin (eds.) *Fügungspotenzen. Studia Grammatica XXXIV*. 89-110. Berlin: Akademie-Verlag.
- Kiefer, Ferenc (1994a) Aktionsarten in Hungarian. *Revista Di Studi Ungheresi* 11.

45-54.

- Kiefer, Ferenc (1994b) Aspect and syntactic structure. In Ferenc Kiefer and Katalin É. Kiss (eds.) *The Syntactic Structure of Hungarian*. Syntax and Semantics Vol. 27. San Diego : Academic Press.
- Kiefer, Ferenc (2006) *Aspektus és akcióminőség*. Budapest : Akadémiai Kiadó.
- Kiefer, Ferenc & Ladányi, Mária (2000) Az igekötők. In Kiefer Ferenc (eds.) *Strukturális magyar nyelvtan. 3. Morfológia*. 453-518. Budapest : Akadémiai Kiadó.
- É. Kiss, Katalin (2002) *The syntax of Hungarian*. Cambridge: CUP.
- É. Kiss, Katalin (2005) First steps towards a theory of the verbal particle, Christopher Piñón and Péter Siptár (eds.) *Papers from the Düsseldorf Conference, Approaches to Hungarian 9*. 59-88. Budapest : Akadémiai Kiadó.
- É. Kiss, Katalin (2004) Egy igekötőelmélet vázlata. *Magyar Nyelv*. 100, 15-43.
- É. Kiss, Katalin (2006) The function and the syntax of the verbal particle, Katalin É. Kiss (eds.) *Event structure and the Left Periphery. Studies in Natural Language and Linguistic Theory*. Dordrecht : Springer
- Komlóssy, András (1992) Régensek és vonzatok. In Ferenc Kiefer (ed.) *Strukturális magyar nyelvtan. Vol. 1. Mondattan*, 299-527. Budapest : Akadémiai Kiadó.
- Komlóssy, András (1994) Complements and adjuncts. In Kiefer, Ferenc & É. Kiss, Katalin (eds) *The Syntactic Structure of Hungarian. Syntax and Semantics Vol. 27*. San Diego : Academic Press. 91-178.
- Koopman, Hilda & Anna Szabolcsi (2000) *Verbal complexes*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kövecses Zoltán (2002) *Metaphor*. New York : Oxford University Press.
- Ladányi, Mária (2000) Productivity as a sign of category change. The case of Hungarian verbal prefixes. In Wolfgang U. Dressler et al. (eds.) *Morphological Analysis in Comparison*, 113-141. Amsterdam : John Benjamins.
- Lakoff, George (1987) *Woman, fire, and dangerous things*. Chicago, London : University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live by*. Chicago: University

of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1, Theoretical Prerequisites*. Stanford : Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 2, Descriptive Applications*. Stanford : Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (2001) Topic, subject, and possessor. In: Simonsen, Hanne Gram-Endresen, Rolf Theil (eds.): *A cognitive approach to the verb. Morphological and constructional perspectives*. Berlin: Mouton de Gruyter. 11-48.

Rappaport, Hovav M. & Levin Beth (2001) An event structure account of English resultatives. *Language* 77. 766-797.

Rudzka-Ostyn, Brygida (1985) Metaphorical process in word formation: The case of prefixed verbs. In Wolf Paprotté & René Dirven (eds.) *The Ubiquity of metaphor: Metaphor in language and thought*. Amsterdam : Benjamins. 209-241.

Szili, Katalin (2001) A perfectivitas mibenlétéről a magyar nyelvben a meg igekötő funkciói kapcsán. *Magyar Nyelv*. 97. 262-282.

Szili, Katalin (2003) A ki igekötő jelentésváltozásai. *Magyar Nyelv*. 99. 163-188.

Szili, Katalin (2005a) A be igekötő jelentésváltozásai I. *Magyar Nyelvőr*. 129. 2. 151-164.

Szili, Katalin (2005b) A be igekötő jelentésváltozásai II. *Magyar Nyelvőr*. 129. 3. 282-299.

Tyler, Andrea & Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge : Cambridge University Press.